

平成27年6月24日作成

ホツマツタエ講座

ホツマの記述が教えてくれた フトマニの占い方法（新解説）

ホツマツタエ研究家 吉田六雄

I、フトマニ考

平成19年7月1日に、フトマニ考の原稿を発表しました。その際は、フトマニの占い手順（マニュアル）は、

現在「フトマニの占い手順」は解明されていないが、ホツマツタエ研究者の鋭意な努力により読者に発表できる日が近いと思っている。その日は「真摯」な研究者のみが知り得ると思いたい。

と発表しておりました。

II、フトマニ再考

平成19年7月1日の発表から今年（平成27年7月1日）までに、8年が経過するに至った。その間、フトマニの占い方法の発表を控えて来た。最近、私のHPを訪ねて来る読者の中には、「件名 ニマトフ（二間を飛ぶ）の法則が示す フトマニの語源」を度々、訪ねて来る人たちが多くなりました。このため、前号の続きとして、これを機会に日頃研究していたフトマニの占い方法（新解釈）を一堂に発表することにしました。良かったら、ご一読をお願いします。

1、フトマニの占い結果

フトマニ図より占われた結果は、三音(三文字・三神)の128通りになっている。その三音の構成は、フトマニ図の内2円、内3円、外4円の音の組み合わせにより、1番目の「アヤマ」～128番目の「シナワ」が占い結果である。（詳細組み合わせは、下記の説明用に抜き出し部を見て下さい。）

説明用

(1) フトマニの文字（円周の記述を抜き出したもの）

内2円（八神）・・アイフヘモヲスシ

内3円(十六神)・・ヤハキチヌムエネコオヨソユツキナ

外4円(十六神)・・マラニリウクテセケレロノンルサワ

(2) 上記の内2音+内3音+外4音の組み合わせの例

ア・・・16通り

1番目の「ア・ヤマ」から始まり、「ア・ハラ」「ア・キニ」「ア・チリ」「ア・ヌウ」「ア・ムク」「ア・エテ」「ア・ネセ」「ア・コケ」「ア・オレ」「ア・ヨロ」「ア・ソノ」「ア・ユン」「ア・ツル」「ア・キサ」「ア・ナワ」

イ・・・アと同じ様に16通り

フ・・・↑

ヘ・・・↑

モ・・・↑

ヲ・・・↑

ス・・・↑

シ・・・アと同じ様に16通り

「シ・ヤマ」「シ・ハラ」「シ・キニ」「シ・チリ」「シ・ヌウ」「シ・ムク」「シ・エテ」「シ・ネセ」「シ・コケ」「シ・オレ」「シ・ヨロ」「シ・ソノ」「シ・ユン」「シ・ツル」「シ・キサ」、128番目の「シ・ナワ」で終わる。

2、フトマニの三音の構成

フトマニの占い結果より考察して三音の構成は、フトマニ図の内2円、内3円、外4円の音の組み合わせにより128通りになる。この占い結果は、前回の平成19年7月1日に発表した通りで変化はない。だが、現実の占い方法から見た、フトマニの組み合わせは、

(1) 内3円と外4円の2音は、一度組み合わせると16通りで固定される。

(2) 次に、(1)項に対し、内2円の1音を8通り組み合わせて行く。

(3)、(2)項まで組み合わせた合計は、128通りになる。

3、フトマニの占い札（仮に札と呼ぶ、以下同じ。）

フトマニには、占い札の説明はない。だが、前述したフトマニの結果より占い方法を考察した結果、占い札の数は、8札（内2円）と16札（内3円と外4円）の24札（識別表）を準備すれば良いことになる。

(1) 8札

「ア」「イ」「フ」「ヘ」「モ」「ヲ」「ス」「シ」の8札

(2) 16札

「ヤマ」「ハラ」「キニ」「チリ」「ヌウ」「ムク」「エテ」「ネセ」「コケ」「オレ」「ヨロ」「ソノ」「ユン」「ツル」「キサ」「ナワ」の16札

4、ホツマツタエの「ウラ」の使用例

今までフトマニの「占い」を説明して来たが、その「占い」の言葉は、ホツマツタエにはどのように記述されているか。改めて調べて見た。抜粋すると、次の4パターンの使用例があった。

- (1) ウラなひて—2件、 (2) ウラの良き日に、(3) ウラ問えは—2件、
(4) ウラなえは—2件

(1) ウラなひて—2件

4アヤ(綾) 10

日高見の	宮に帰れば
イサナミの	父に申して
世嗣ぎ子も	ガナとオホ(思)せば
ウラなひて	月葛城の

16アヤ(綾) 8

本つ国	ココトムスビは
ウラなひて	良き日にちなみ
整ゑて	寿き終えて
睦まじく	コヤネは天に

(2) ウラの良き日に—1件

11アヤ(綾) 2~3(1行)

多賀の国府	ツホ若宮の
殿シマも	高屋薨も
悉く成り	ウラの良き日に
渡御の	君はアマテル
世嗣皇子	

(3) ウラ問えは—2件

20アヤ(綾) 22(2行)~23(1行)

	神勅宣れは
ホノアカリ	マウラお召して
ウラ問えは	マウラフトマニ
アキニ取る	

37アヤ(綾) 1

珠城宮	二十七穗八月
七日ヲミト	軍器お
神弊に	ウラ問えは吉

(4) ウラなえは一2件

2 7 アヤ（綾） 4 4 （4 行）～4 6 （1 行）

コヤネフトマニ

ウラなえは	八瀬姫よけん
ハ一の五は	中の八となる
シのハラは	母と妊める
ハの局	内待は中の
位なり	

3 8ー6 （3 行）～7 （2 行）

三穂の春	如月初日
紀の国に	神祀らんと
ウラなえは	行くは良からず
御幸止め	

5、ウラナヒの意味は、

「占い」の「ウラ」の使用例について、前述のように、「ウラなひて」、「ウラの良き日に」、「ウラ問えは」、「ウラなえは」の4パターンをホツマツタエより捜し出した。だが、その「ウラ」の本来の意味は、まだわからないようである。

(1) ウラの言葉の種類

そこで、更に、ホツマツタエより「ウラ」に関する単語を捜した。すると、「ウラ（裏）」「ウラ（浦）」「ウラみ（恨み）」「ウラやむ（羨む）」の4種類の言葉があった。この内の「ウラみ（恨み）」「ウラやむ（羨む）」は、3音、4音であり、2音の「ウラ」の意味からは外れるようである。残るは、2音の「ウラ（裏）」「ウラ（浦）」である。

(2) 2音の「ウラ」

更に、「ウラ（裏）」「ウラ（浦）」のホツマツタエの代表例を見ると、裏表の「ウラカガミ（裏鏡）」と、水際、海辺の「フタイワウラ（二岩浦）」が上げられる。ここで「占い」に適した「ウラ」は、「ウラ（裏）」になるようである。

(3) 「ウラナヒ」とは「裏の意」であった

このようにして、「ウラ」に「ウラ（裏）」を当て嵌めると、「ウラなひて→裏なひて」、「ウラの良き日に→裏の良き日に」、「ウラ問えは→裏問えは」、「ウラなえは→裏なえは」に置き換えることができるようである。そして、占いは「裏なひ」のことであり、「裏」は「裏」、「な」は「の」の古代語であ

り、「ひ」の古代語訳は「意」を意味する。そうすると、「ウラナヒ」とは「裏の意」であり、占いの本来の意味は「裏の意味」を知ることになる。

6、フトマニの占い方法

前述のように、フトマニの占い結果→フトマニの三音の構成→フトマニの占い札→ウラナヒの意味と、ホツマツタエの記述より遡って検討して来ると、必然的にフトマニの占い方法を解説できるようである。そこで、検討結果より導かれたフトマニの占い方法（手順）を、具体的に順を追って説明して見たい。なお、未確定な項目については、想定される案を提示し解説を進めて行きたい。

1）フトマニ図を利用した占い方法（案）

（1）準備する占い道具

フトマニ図の内2円のアイフヘモヲスシを記載した円盤形を上、内3円と外4円の「ヤマ」「ハラ」「キニ」「チリ」「ヌウ」「ムク」「エテ」「ネセ」「コケ」「オレ」「ヨロ」「ソノ」「ユン」「ツル」「ヰサ」「ナワ」を記載した円盤形を下にして、同じ軸上に回転できるように準備する。

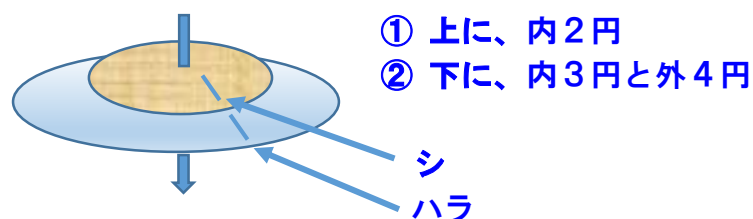
（2）占い日、時刻の設定（基準）

1日は8穂で数えていたため、上の円盤形に記載されたアイフヘモヲスシに占う時の今で云うところの時刻の文字を決める。時刻の設定は、朝日が出る時刻より始まり、ア（6～8時）、イ（9～11時）、フ（12～14時）、ヘ（15～17時）、モ（18～20時）、ヲ（21～23時）、ス（24～2時）、シ（3～5時）とすると、1日8穂を満足するようである。

（3）占い手順

- ・ 占う時刻の上の文字を指定する。（例）夜中の4時の場合は、「シ」
- ・ 次に、二つの円盤を手で任意に回転させる。
- ・ 二つの円盤が静止した時の上の「シ」に位置が合っている下の円盤の文字を読み取る。（例）「ハラ」
- ・ 占い結果は、「シハラ」となる。

同じ軸上に回転するフトマニ図



2) 「ウラナヒ」の「裏の意」を加味した占い方法（案）

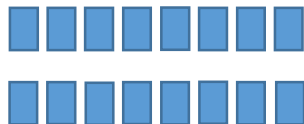
（1）準備する占い道具

フトマニ図の内2円のアイフヘモラスシを記載した札を8枚、更に、内3円と外4円の「ヤマ」「ハラ」「キニ」「チリ」「ヌウ」「ムク」「エテ」「ネセ」「コケ」「オレ」「ヨロ」「ソノ」「ユン」「ツル」「キサ」「ナワ」を記載した札を16枚準備し、別々のグループにし裏に伏せて準備する。

（2）占い手順

- ・裏にした8枚のグループより、任意に1枚を表に返す。（例）「シ」
- ・次に、裏にした16枚より、任意に1枚を表に返す。（例）「ハラ」
- ・占い結果は、「シハラ」となる。

16枚のグループ
（内3円と外4円）



8枚のグループ
（内2円）



（注1）2）項の札（案）は、竹ひごなどに置き換えても同じ占い結果を得る。
その場合は、二つの筒に8本、16本入れて準備し、各1本ずつ引く。

（注2）間違った占い方法

筒を2個の所を3個準備し、各8本を入れて準備し、各1本ずつ引くとする占い方法では、フトマニの占い結果の128通りでなく、512通りの組み合わせになる。この512通りの占い方法は、間違いでありホツマツタエの記述にない方法である。原因は、身勝手なホツマ読みが露呈した間違いのようである。

7、まとめ

8年ぶりに、フトマニの占い方法を発表できた。まだまだ、未知の部分が多いが、平成19年7月1日に「フトマニ考」を発表した時の思いと同じである。

今回、「フトマニの占い手順（案）」は発表できたが、まだまだ、ホツマツタエの読み方が不足しているようである。今後も、鋭意な努力により読者に更なる内容を発表できる日を信じたい。その日は「真摯」な研究者のみが知り得ると思いたい。

（おわり）

・・・・・・・・・・（下記は、前回発表分）・・・・・・・・・・

平成19年7月1日作成

フ ト マ ニ 考 (第32号)

ホツマツタエ研究家 吉田六雄

ホツマ・フトマニの占い

古代日本の占いは、「太占」と「八卦」が代表格であろうか。
「ホツマツタエ」文献にはその「占い」として、「フトマニ」が記載されている。

20-22 文

マウラを召して
占問えば マウラ太占
アキニ取る

中国より渡来の「太占」「八卦」

現在日本で行われている「太占」や「八卦」は、古代中国のものが伝来したと伝えられている。その占いについて、辞書「新選国語辞典・金田一京助」より意味を調べて見た。

☆太占

上古、鹿の肩の骨を焼き、その割れ目の形で占ったこと。

☆八卦

易にあらわれる八種の形。占い。易者。

ホツマ・フトマニの占い手順(マニュアル)

現在の「太占」や「八卦」については占い方法が判明しており問題ないが、ホツマツタエ当時の「フトマニ」の「占い方法」については、「ホツマツタエ」文献を調べて見るが、今のところ不明な点がある。その不明な点は、一般的な占い比較論から考えて、①占い道具、②占い表、③占い手順(マニュアル)の内、②占い表は存在するが、①占い道具と③占い手順(マニュアル)が記載されてないため、不明と云わざるを得ない。

それでは何故に「占い方法」に探求するかと云うと「フトマニ図」が、完成された「占い表・フトマニ図」と思えるからである。この完成されて「フトマニ図」が存在するのに、その「占い道具」や「占いの手順(マニュアル)」が「ホツマツタエ」文献に記載がないためである。それにしても、更なる興味は現在の「太占」や「八卦」と共通する部分が存在する「占い」であるか否かであろうか。

フトマニ図

それにしても「占い道具」や「占う手順(マニアル)」は不明でも、その後の占われた「指数」より「フトマニ図」を索引し、その「占い結果」を知ることができる様である。その占い結果は「三音」の組み合わせで、「128 通り」に表されている。またその「三音」、「128 通り」の組み合わせがどの様に構成されているかを説明する。

それでは、先ず「フトマニ図」を良く観察する。するとその「フトマニ図」に円が、内側より 1~4 円あることがわかる。その円の内側より 2 番目の円「八神・・アイフヘモヲスシ」を「三音」の「最初の音」となる。次に、内 3 円「十六神・・ヤハキチヌムエネコオヨソユツキナ」と外 4 円の「十六神・・マラニリウクテセケレロノシルサワ」から、放射方向の列より「3 円、4 円」の順で選ぶ「2 音目」「3 音目」を抽出する。この様にして「三音」の「128 通り」の「占い結果」が「フトマニ図」より作成される。この様にして作られた「フトマニの占い結果」が文献に既に記載されていることから、「フトマニ」の「占い道具」や「占い手順(マニアル)」は現在では不明であるが、古代に「フトマニ」の占いが行われていたこと立派に説明される。

128 通り・・三音(三文字・三神)

内 2 円 (八神)・・アイフヘモヲスシ

内 3 円(十六神)・・ヤハキチヌムエネコオヨソユツキナ

外 4 円(十六神)・・マラニリウクテセケレロノシルサワ

内 2 音+内 3 音+外 4 音の組み合わせの例

ア・・・16 通り

「ア・ヤマ」「ア・ハラ」「ア・キニ」「ア・チリ」「ア・ヌウ」
「ア・ムク」「ア・エテ」「ア・ネセ」「ア・コケ」「ア・オレ」
「ア・ヨロ」「ア・ソノ」「ア・ユン」「ア・ツル」「ア・キサ」
「ア・ナワ」

イ・・アと同じ様に 16 通り

フ・・	↑
ヘ・・	↑
モ・・	↑
ヲ・・	↑
ス・・	↑
シ・・	↑

フトマニの語源を考える

「フトマニは占いのこと」と過去に勉強した知識より咄嗟に答えてしまうが、実のところ「フトマニ」のことが、良くわかってなかった。ましてその「フトマニ」の語源については、何もわかってない。

そこで 2007 年 4 月 4 日のある時に、「フトマニ図」を眺めながら長考していると、ある「法則」になっていることに気がついた。その法則の発見は、「フトマニ図」の文字の「記載順」と「読み順」の違いであった。

例えば「フトマニ図」の内側の 2 番目の円が、右回りに「ア」から「アヘスイモシフヲ」の順に右回りに記載されているのに対し、実際の「フトマニ図」の読み方は、「アイフヘモヲスシ」の順になっている。この読み方は、「ア」を起点に右回りに、「二つ中、飛びの右回り」に「読んで」行くことであった。また「フトマニ図」の内側の 1 番目の円の「トヒカメエホタミ」(並び順 12345678)の記載順でも、読み方は「トホカミエヒタメ」(読み順 16385274)になっていた。同じ様に「フトマニ図」の内 3 音「ヤハキチヌムエネコオヨソユツキナ」、外 4 音「マラニリウクテセケレロノノルサワ」も同様であった。そしてこの読み方の法則の「二つ中、飛びの意味」が、「フトマニの意味では?」と気がついた。それにしてもフトマニ図を読む時と同じ様に、「フトマニ」の単語を右回りに読むと、「フトマニ」は「ニマトフ」・・・「二間を飛ぶ」と読めることに気がついた。

このことから「フトマニ」とは、「ニマトフ」の駄洒落遊びの「心」を取り入れた、古代人の「逆読み」であったことに気がついた。そしてその「法則」とは、「二間を飛ぶ」ことであった。

モトアケ(フトマニ図)

これまでフトマニ図と説明してきたが、本来の呼び名は「モトアケ」が正式である。そしてこの「モトアケ」について、「モトアケ」を作成する基になった「原画」は、何であろうかと考え時期があった。そんな折りに、たまたま川越の「蔵の町」に散歩に出かけた。蔵の町には、道の両側に江戸の風情を残した「蔵造り」建築物が並び、また「時の鐘」などもある「レトルト調」の町並みであった。この「蔵の町」には、今年に入り既に 2 回も散歩に来ていた。そしてこの「蔵の町」で「モトアケ」の原画では?と思える物に出会った。それは真鍮で作られた「亀」であった。その亀の甲羅の模様を見た瞬間に、これが「モトアケ」だと思えた。

(注)亀の種類によっては、甲羅の模様が違うこともある。

そう言えばホツマツタエ文献に、「池の亀」が 24-115 文が記載されていた。

24-115 文

池の亀	葉お喰む万の
占形は	合うと離ると
亀占は	水湧く湧かぬ
御心お	尽くす御孫の
ホツマ	なるかな

そして「池の亀」「万の 占形」や「亀占は」などのこの単語は、「フトマニの占い」への単語と相通じる言葉であると思えてきた。

モトアケと亀の甲羅模様の比較

私の家族では 10 年前まで、一匹の「小さな亀」を飼っていた。餌はミミズなどを裏の屋敷より、土を耕して与えていた。その時にまさか「亀の甲羅」を新たに描こうと思ひもしなかった。そこでインターネットより「亀」を検索し「モトアケ」と比較して見た。

亀の甲羅 （出典）

楽天／亀の甲羅大特集を引用させて頂きました。



モトアケ (出典)

フトマニ図

(引用HP: ホツマツタエ目次) <http://www.hotsuma.gr.jp/futomani.html>



モトアケと亀の甲羅の比較は、

- ② モトアケの中心部の「アウワ」の 3 個に対し、亀は「六角模様」が 3 個ある。
- ② モトアケの内 1 円と内 2 円の模様個数は各 8 個に対し、亀は内 2 楕円の「六角模様」が 10 個ある。
- ③ モトアケの内 3 円と外 4 円の模様個数は各 16 個に対し、亀は外 3 楕円「六角模様」が 24 個ある。
- ④ そして共通点は、「内円の 1 個の模様に対した次の円の模様個数は、倍の 2 個」との関係である。この模様の関係は、モトアケの内 2 円は 8 個に対し内 3 円の個数は倍の 16 個である。同じ様にして亀の甲羅を見ると「内 2 楕円の 10 個に対し、外 3 楕円の個数は 24 個」である。そして亀の外 3 楕円の前と後ろの 4 個の模様が変則のため、24 個より 4 個を差し引くと 20 個である。そこで正規の模様だけで考えると「内 2 楕円の 10 個に対し、外 3 楕円の個数は 20 個」となり、モトアケと同じ様に「内 2 楕円の 1 個の六角模様」に対し、「外 3 楕円の個数は倍の 2 個の六角模様」の関係になっていた。
- ⑤ この中心部の「アウワ」の関係、そして「1 対 2」の関係から、「モトアケ」の基に「亀」が原画になっていたことが容易に推定される。

日本古来の呪文

それにしても「日本古来の占い」についていろいろ調べている内に、「太占」の占いで、インターネット(注2)情報の「太占の説明」を省略することができなくなった。その理由は「太占の中のひとつに過ぎないが、亀ト・鹿トの占いの過程の中で、日本古来の呪文として、「トホカミエミタメ」という呪文を唱えていたことである。この「トホカミエミタメ」の呪文は、フトマニ文献の「モトアケ」の内1円に記載された「トヒカメエホチメ」、読み並びにて「トホカミエヒタメ」と同じであることから、この原則をホツマツタエ研究者は「無視」できないことと捉えるべきであろうか。

このことは、「検証ホツマツタエ(31号)・平成19年6月」で、「フトマニ占い手順」「一ひとつの推論」が掲載されているが、その一部に疑問があるからである。その疑問は、占い結果を抽出する方法にある。それは「8本の棒より3回抽出・・・」の推論の組立て方に問題がある。

「モトアケ」より3音の「アヤマ」等の占い結果として導かれていることは推定はできるが、「8本の棒より3回抽出・・・」の方法は、あくまで「八卦」の抽出方法に似た方法であると思える。

(注1)ホツマツタエ文献には、8本の棒より抽出等の記載がない。

もしこの方法が「ひとつの推論」として許されるなら、次の方法も許されることになる。

それは皆さんもご承知の「年末等のジャンボ宝くじ」の抽選方法に似た方法である。仮に回転している円盤が3個ある。その一つずつに1~8の数字を割り振られたゾーンが描かれている。そして女性の抽選者の3名は合図を元に、矢が放った。矢が当たった数字は、「8」「1」「5」である。そして「モトアケ」を読むと「シハラ」になる。この「シハラ」は、「ホツマツタエ」文献の28-90~91文の「フトマニ」の占い結果になる。そしてこの証明方法でも「ホツマツタエ」当時の占いとして、許されることになるが、読者の感想はどうでしょうか。それにしても、「日本古来の呪文」として、古代の日本に「トホカミエミタメ」という日本古来の呪文を唱えていたことである。この「トホカミエミタメ」の呪文は、「モトアケ」の読みと同じである。

インターネット(注2)の太占の説明

亀ト(きぼく)・鹿ト(ろくぼく)

太占(ふとまに)の中で最も有名なのが亀ト(きぼく)・鹿ト(ろくぼく)と呼ばれる占いで、一般の辞典などでは「太占」という言葉の説明として、誤ってこの亀トや鹿トの説明をしているものがあるほどです(「ケーキ」の項目にストロベリーショートケーキの説明をしたようなもの)。

しかし亀ト・鹿トは太占の中のひとつにすぎません。亀トは亀の甲羅を使用

した占い、鹿トは鹿の肩胛骨を使用した占いで、現在でも日本の各地の神社で神事として行われています。亀トのことは中国の古代の書物「易経」にも書かれていますので、大陸ではかなり古くから行われていたようです。モンゴルでは羊の肩胛骨を使う方式も発達したようですが、日本では亀を使う方式と鹿を使う方式が二大流派として残りました。

日本に伝わるやり方では、亀の甲羅や鹿の肩胛骨の一部を割れやすくなるように薄く削り、そこにトホカミエミタメという日本古来の呪文に対応した傷を付けます。これを火に投じて、どこがひび割れたかで、神意（オラクル）を問うのです。

(注 2)この情報は、「www2.tora-inc.com/aol/futomani/three_sacred_treasures.html-キャッシュ」より引用した。

フトマニの占い手順(マニュアル)

現在「フトマニの占い手順」は解明されてないが、ホツマツタエ研究者の鋭意な努力により読者に発表できる日が近いと思っている。その日は「真摯」な研究者のみが知り得ると思いたい。

(おわり)